

實錄曾我物語

特60
276

205170-000-9

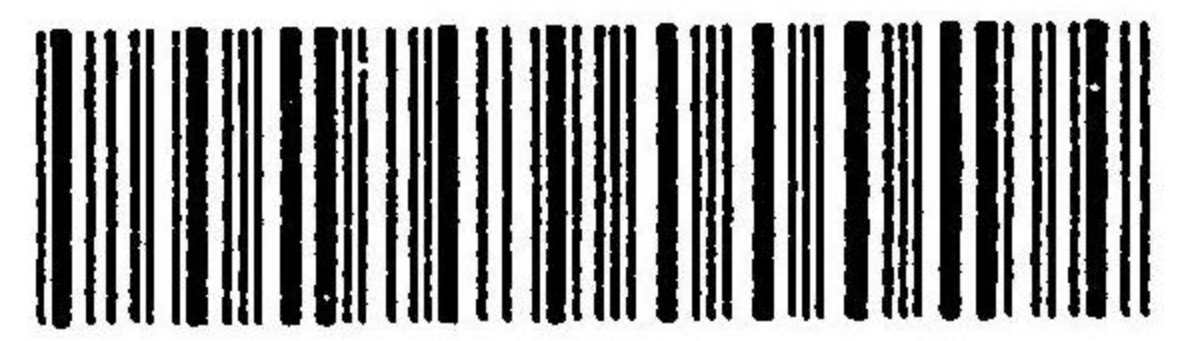
特60-276

實錄曾我物語

町田 滝司/編

M17

EDV-0191





二書房

發兌所

曾我物語の序

此母にして此子有世子にして此妻有曾我母子兄弟虎の如き

の世に珍らしき孝男烈女也人の妻として年若くて夫を失

ひ子を持つ者所成時致の母を傲べし仮令再嫁ととも婦道を

守者として人の平として其孝なき者禽獸に劣と唯書籍の上の

教でての孝道の意味を悟こと淺し曾我兄弟の艱苦義勇を了

知し之を傲べし甚難効として虎を師と仰ぎ其行を正らせ

バ泥水に身の沈むとも濁に染ぬ蓮葉の如し若既往に非有人

の此本を觀て速に改め玉へと爾いふ

實
曾
俄
物
係

止
條
時
政



謀
有
子
言

五
郎
時
政
十
郎
格
成



實會我物語

東京 町田瀧司編次

第一回

爰に伊豆國久須美庄(伊東宇佐美河津の三ヶ所を總稱す)の領主に四郎太夫家繼となん云へる者ありけり其妻三人の男子を遺して世を早うしける時に同國の住人大見平三家政が女玉江下野國の住人八田八郎宗基と嫁して一女を儲けしが宗基死去けるより女兒と共父の家にて居たりけり

家繼夫が容姿の艶麗あるを聞き切大見よ乞ふ家政家繼の産威共大ひなるを知るが故に異義なく承諾て玉江を諭し其女水草を伴ひ家繼に再家せしむ然るに玉江前夫宗基を慕ひ鬱々として終に果敢なくなりよける家繼頻り嘆き悲みしが去もの日々に疎しくかり其女水草が美色に心を動かして是と違後妻とす程よく一子を産む乙石と号く是より水草我子をもて家督となさんと思ふより頻りに奸計を施し家繼誕辰の祝の日嫡子祐家を鳩殺す家繼此謀を之知らず水草が佞辨のために惑はされて遂乙石を家督となし祐繼と改

ひまた祐家に一子あり祐親といふ是は河津の庄をあたへ家
 繼ハ入道して寂蓮禪門と号す祐親水草が悪行を粗知る故に
 父の仇を報へんと頻りに頭を悩せども好機なけれハ詮方な
 く空しく幾その年を送りけりさる程に家繼入道寂蓮没し水
 草次で没す祐繼遺跡を續ぎて妻を娶り三人の男子を儲く長
 を兼石次を皆石三を駒法師と名づく時に久壽二年の秋帶刀
 先生義賢所領武藏國大藏に反す源太義平勅命を蒙り是を攻
 む其折祐繼加勢たりしが合戦の際矢よあたり故郷に歸りて
 死期に及び河津祐親を招き嫡男兼石未だ幼なるをもて十五

才に至る迄後見を頼み置て冥目す祐親得たりと伊東に移り
 河津を改めて伊東と名乗年來の積鬱零散じたりと内心大ひ
 に悦びける光陰に關守あく隙ゆく駒の足掻き早ふして兼石
 十五才になりけれハ元服して祐經（姓を工藤と云ふ）と改
 名す伊東祐親之に女兒滿江を配偶せ京都に登し其母にハ二
 人の子皆石をそえて宇佐美庄に閑居せしむ程なく夫が兄
 弟共に元服し皆石ハ宇佐美三郎祐茂と名乗駒法師ハ伊豆次
 郎祐兼とあらたむ斯て幾その年を送りしが承安年間母病
 にかゝりて死す其没するにあたり一通の狀を認め祐繼が遺

せし書と共に祐經に與ふべしと云ふ依て祐兼上京して兄の家を訪ふ時に祐經武者所の一鴈を拜し工藤一鴈と号と弟祐兼に對面して故郷の様が母の遺言を聞き目驚き目悲みなく其遺書父の遺書を披き見憤然として今此書を見るに當時祐親が領する地の父より譲り給へるにあらす某十五才及ぶまで後見を頼みたまへるなり然れば速く我に所領を返さべし等なるに彼其儘押領するのみならず我等親子を接遇こと恰も奴僕に等し是横道とや謂わん非義とや謂わん此上の直に伊豆に下り祐親に對面して其罪を糺さんと敦諭あら

く誓るを祐兼制し其怒道理りにあわれと先彼が所存を問て後事を發せらるべしといふに祐經實にもと思ひにければ家隸兩人を伊豆に下し件の趣を申し入れけるに祐親更に取あへざるにぞ祐經いよく怒り六波羅ある小松内府に訴ふ内府則ち祐親を召し札問あるに祐親水草が悪行の始末を聞え上げ猶家系を述て某こそ伊東の嫡流おれバ元より領すべき地なれといふ内府之を聞き夫が乞とてころ道理なりと覺ゆ然れと祐經も先主祐繼が嫡子なれば無下に捨べきにあらずとて宇佐美の一庄を與ふ祐經目的大ひに相違し心中面

白からねば伊東を怨む事まどく甚だしくして遂に駿河なる外叔高橋小太郎重長とはかり祐親を討亡さんとと松江四郎といへる者之を洩聞さ密に伊東に告ぐ祐親大いに驚き一門諸族を招き集へて防戦の用意をぞなしける

○ 第二回

時に兵衛佐頼朝同國姪々小島に在て此事を聞とひとしく伊東が館に到り祐親父子以下加勢の諸將に面會して此戦闘の國家のためは害あつて利なき旨を纏々説諭しまた工藤が家へも狩野茂光佐々木盛綱を遣として百方論さしめ終に事な

く和睦せしむ然れど祐親憤怒猶止ざりければ六波羅に聞の上て宇佐美庄の年貢所得を悉く我方へ取上げ祐經にのり一毫も渡さざる而已ならず夫が妻満江をも取戻して土肥次郎實平が嫡男彌太郎遠平に再び嫁がしめぬ斯有程に祐經伊東を怨む事以前より百倍し何卒彼を亡ひて鬱憤を散さんと種々謀れども力及ばねば大見小藤太成家八幡三郎行氏の兩人に助力を乞ひしに二人共に異論なく承引けるにぞ祐經よろこび夫が厚情を謝して其日の其儘立わかれぬ爰に又伊東祐親の其子祐道(東鑑よ)の祐泰を見ゆと計り祐經異心の時尽



力ありし人々を招き夫が勞を報謝せんとして安元二年十月八日より十日に至る迄三日間同國奥野に狩獵を催しぬ是に會する士卒總て二千八百人どぞ聞はし問話休題大見小藤太八幡三郎此催しあるを聞て雀躍して謂へらく此時祐經が頼みの義を果さずんばいつか望を達すべき好機失ふべからずと兩人連立て赤澤山に赴き其阪路に忍び居て祐親を射らんとし誤つて祐道を射る祐道名うての剛者あれハ深手に屈せまじと見返り此ハ是れ大見八幡等の所業なるべしまた這奴等も祐經に頼まれつるならんと言つゝ終に息絶たり大見八幡

へ此勢このいきほひも恐れおそれまどひ二箭にのやをつぐの念こころもなく逸足いさあしはやく迹あと
 去さりたり祐親よけちかりがこ我子わがこの横死わやうしを見て悲歎つたんに堪たえず入道にゅうだうして寂心しやくしん禪ぜん
 門もんと号がうす祐道よけみち二子にしあり兄あにを一万いちまんと云いひ弟ていを箱王はこおうといふ時に
 一万いちまん五才ごさい箱王はこおう三才さんさいなり其母そのはは祐道よけみちの死骸なきがらに鎧よろいりつき泣悲なみしみ
 思おもひの餘うまりに二人ふたりの子こを招まねき父ちちが事こと祐經よけつねが事ことを言和ことやはらかよ
 説聞とくわんせ情なさいふやう腹はらの中うちの子こさへも母ははのいふ事ことの聞辨ききわふと
 か聞きく況まじて和子わこ等らへ已まよ五才ごさいと三才さんさいよなりけるににあらず
 や依よてよくく母ははの語かたりし事ことを心得こころはて人ひととならば必かならず家尊かぞ
 の大人うぢの讐うぢを討うちねと云いに一万いちまん死したる父ちちの顔かほをつくぐと見み

て落おる涙なみだを拭ぬぐつ、是これから大人おとなしう大たきう成なつて父ちちの敵かたきの首くびを
 切きり祖おぢい父さま様さまや母はは様さまに見みせ參まゐせんと健氣けんけを言葉ことばに列居らゐる人々ひとら
 一同いっどうに涙なみだに袖そでをぞ濡ぬける其母そのはは翌よく安元あんげん三年ねん三男さんなんを産うみ捨すんと
 祐清よけきよ妻つまと計はかりて是これを養やしなひ御房ごぼう丸まると名なづく斯かくて幾いく其月そのつきを送おく
 るうち忌果いみはてにければ後室こうしつ尼あまよならんと請こふ祐親よけちかり入道にゅうだう許ゆるさず
 三年さんねんを過すぎ曾そ我わが太郎たらう祐信よけのぶへ再嫁さいかせしめんとす后室こうしつ固辨こくべんて服ふくさ
 ず程ほど經へて祐清よけきよの妻つまをもて利害りがいを説諭とくごしむ後室こうしつ今いまハ否いなに言葉ことば
 かく遂ついに一万いちまん箱王はこおうの二子にしを伴ともひて祐信よけのぶに嫁かす是これより嚮安元きやうあんげん三
 年さんねん二月ふたつき祐親よけちかり入道にゅうだう祐道よけみちの仇あだを討うちんと次子つぎこ九郎くわうらう祐清よけきよ郎らう兼細かねこ代小しろこ



中太の兩人よ各三十人の兵を授けて襲しむ祐清八幡を
 討ち小中太大見を殺す再説一万箱王の共に幼心にも復讐
 の事を忘るゝ間なく苟且の戯れよも刀撃業を弓ひく事をも
 て遊びとせり斯りし程は祐信其殊勝の心根をめで愛する事
 實子の如く武術のさらなり文道さへも各師をばらみて習
 むるよ皆一を聞いて二を知の秀才あれば一万十二才箱王九才
 に成ける頃には早大人も及ぬ程に上達をしぬ

○ 第三回

話分却説源頼朝の久しく蛭ヶ小島に流人となつて在りが

治承四年高倉宮の令旨を蒙り其八月石橋山に義兵を擧げ竟
 よ平家の一族を攻亡し全國を一定して覇を鎌倉よこしてにき
 時よ工藤祐經參集して加勢せしかば其功により左衛門尉よ
 昇進し深く用ひられけるよど勢威他の士よ越へて盛んなり
 けり是より先伊東祐親賴朝兵を擧しとき平氏の命を蒙り是
 が討手に馳向ひ一度賴朝が兵を破りたれども其猛勢に當り
 難く思ひよければ降參せしかば賴朝聞入れずして終に首を
 刎たりけり案下休題工藤祐經の祐道が遺子一万箱王等が行
 未父の恨をいらさんと己れをつけ規ねる由洩聞けるにぞ安

き心なく何卒彼兄弟をささ者として後難をのぞき枕を高く
 して眠らんと思ふより賴朝は讓いて謂へらく曾我一万の兄
 弟未だ幼稚いへども彦御を祐親の讎ありとて怨みまつると
 の事あれば彼の儘生置て、后のため然るべからざると、語
 葉を盡して種々に聞かせるにぞ賴朝遂よ夫が奸舌よまど
 わされ梶原景季に命トて曾我より一万箱王の二子と召さし
 め將よ斬らんとと畠山重忠是と聞き身よかへて助命を乞
 かば賴朝夫が舊功にめんじ兄弟が命を助けて祐信の許へぞ
 赦しけるさる程よ翌年一万十三才になりければ元服して十

郎祐成とぞ名乗ける時、母箱王を呼び汝ハ箱根の別當が許
 よゆき僧とありて父の後世を吊ふべいと云、箱王心す、
 ねと否むべきにあらねば其命に従ひて箱根山よ登り僧行實
 の弟子となり十四才よぞなりける時、頼朝同山よ参詣あり
 箱王聞て思へらく當時祐經は夫が權臣なりと聞く然れば定
 めて相具して來つらめ咄哉其面を見覽んものと帷幕の蔭
 にかくれ居て一人の僧を招き此列坐の中に工藤祐經殿ハ在
 るとぞやと問へば僧何心なく彼の右の方の上よ坐すること工
 藤殿されと云、箱王近く寄て見覺ねんと守刀と脇の下よ差



隠し祐經が背近くねらひ寄けり祐經是を見て彼の童子の容
 貌河津三郎に似たる事よ實は當山よの祐道が遺子の居ると
 聞く若し夫にてのあらざる乎と給仕の僧を招きて問へば宣
 ふ如しと答へける祐經さこそと思ひ此方へ來ねとさし招け
 ば願ふ處と箱王の夫が邊近く進みよる祐經左の手を上てそ
 の肩をおさへ右の手をもて髪かさ撫つ和子の河津殿の遺子
 なりと聞く己れの御身が父どの従弟同士なる祐經なり其様
 を見るよつけ昔しの事思出られて今更哀に存するぞかし斯
 く對面する上の以來事あらば必ず一臂の力を添べければ心

置なく相談はれよまた一万殿へも此由傳えたまひねと懇切
 に説論しつ引出物なりとして刀一腰贈りける箱王の其言葉な
 んどの耳にもかけず隙あらば刺殺さんと思ども衆人四邊に
 圓坐して眼をはなさき且力強き男に肩をおさへられて在け
 るにぞ慙よ事仕出して後れをとらんより重ねて好機を伺
 ふこそまじあらめと思ひ返し其日の無事よ別れにき斯てよ
 り箱王復讐の念いよ一切なれども好機あければ詮方なく
 此處よ四年計り送り十七才にありにけり斯有し程に師行實
 是が髪を剃らせんとて其由説論すよ箱王元より出家とある

の意^{こころ}あければ夜^よに紛^{まぎ}れて此處^{こゝ}に逃^{のが}れ曾我^{そが}へ飯^{かへ}りて密^{ひそ}かに兄^{あに}十郎^{じゅうらう}に對面^{たいめん}し前^{まへ}の始末^{しじまつ}を語^{かた}り出家^{しゆつげ}となるの念^{ねん}なき故^{ゆゑ}何卒^{なにぞげん}元^{もと}服^{ふく}を加^{くわ}え得^えさせんと直^{ただ}に兩^{りゆう}服^{ふく}をさんこそ願^{ねが}はしけれと言^いに十郎^{じゅうらう}實^{じつ}に尤^{もつとも}の事^{こと}ありけり然^されば是^{これ}より北條^{ほつとう}殿^{どの}を頼^{たの}みて元服^{げんぷく}を加^{くわ}え得^えさせんと直^{ただ}に兩^{りゆう}人^{にん}連立^{れんりつ}て時政^{ときまつ}が館^{たて}に赴^{おもむ}き十郎^{じゅうらう}弟^{あに}に代^かつて夫^そが衷情^{ちゆうじやう}と語^かり何^{なに}卒^そ貴^き所^{しよ}を頼^{たの}みて烏帽子^{かぶと}親^{おや}となし弟^{あに}の望^{のぞ}みを遂^{とげ}させたく思^{おも}ふより斯^か伴^{とも}ひて参^{まゐ}りなりといふを聞^きて時政^{ときまつ}夫^との元來^{もとより}我が望^{のぞ}む所^{ところ}あれは己^{おの}れが子^ことありまゐらせんとて則^{すなは}ち式^{しき}の如^{ごと}く行^{おこ}ひ烏帽子^{かぶと}を着^きせ名^なに五^ご郎^{らう}時致^{ときぢ}と命^{めい}じ引出物^{ひきで}として馬^{うま}へ黒革^{くろがわ}の

腹巻^{はらまき}一領^{ひとしやう}副^ふえて送^{おく}りし程^{ほど}は兄弟^{きやうだい}共に大^{おほ}に喜^{よろこ}び厚^{あつ}く恩^{おん}を謝^{しや}して曾我^{そが}へぞ飯^{かへ}りける

○ 第四回

斯^かて兄弟^{きやうだい}曾我^{そが}へ飯^{かへ}りよければ母^{はは}五郎^{ごらう}を見^みて且^{かつ}驚^{おどろ}き且^{かつ}怒^{いか}り汝^{いまし}のいかゞあるこゝろぞや妾^{めかけ}の法師^{はふし}とあさんとして箱根^{はこね}へこそこのぼしつるかれ夫^そを何人^{なんびと}のゆるしを受けて男^{おとこ}にはありつるぞ然^{しか}か母^{はは}の教^{おしな}をまもらざるうへからの以後^{いご}妾^{めかけ}も子^こといねもはねば汝^{いまし}も親^{おや}と思^{おも}ふべからず親子^{おやこ}の縁^{ゆかり}はこれまでありと云^い放^{はな}して奥^{おく}へぞ入^いりたる五郎^{ごらう}かくあらん覺悟^{かくご}よていわれ

並餘りの事に言葉も出ず愀然として居たりけり十郎是を論
 し是に兼て思ひ設けし事あり且御怒とても一時の事にしわ
 れば解けざる事やのあらじ先夫迄の何方へか赴きて日を送
 らんいでくと勵ましつ又慰さめつ此家を立出で兄弟共に
 大磯黄瀬川三浦の邊を呻吟て忍びやかに敵祐經をぞ覘ひけ
 る建久四年頼朝富士野に於て狩獵の催しあり依て祐經も隨
 従して赴きけり祐成時致是を聞て大ひよ喜びこれぞ天の與
 ふる時なる若し此期を延さば何時かの本懐を遂べきとて共
 に同地に往かんと思ひ定めしが是を母に告さるの不孝なり

然のどて明々地に知らすべきにあらねば夫となく記念の品
 を乞受て最期まで身に添んこそ宜んなれと兄弟送よ談合
 一つ母の許に至り十郎の無斷に家出せしのみにて外にさせ
 る誤のあるにあらねば母も面會して夫を詫しよ事なく死さ
 れけるよぞさて云ふやう某公をすべき身よのあらね共末
 代迄の物語に富士野の狩の供いた一度思ひまつりぬ附てハ
 恐れ入たる義にハハ之共御小袖貸たまはりたると云に母夫
 ハえうあき事にこそ仕まつらぬ身よ一あれバ如何なる功あ
 りとも夫を聞え上るに便なからめ目斯る寢々一き様を舊き

知己の人々に見留られお返つて恥辱をとるの基なれば必
 ぞ思ひ止り給へさはれ湯身の小袖餘りに古たれば小袖のど
 らまゝおらせむと練絹の小袖を取出してぞ與へける祐成拜
 謝して是をうけ次間へ退出己が衣と着かへ脱たる衣の其儘
 置ぬ是の夫とあく記念に遺し置しかり時致も勘當の身に
 あれど何卒免しをうけて母の湯姿を拜さばやと祐成をもて
 言葉を尽して詔入つれと母始々の程の堅く呑みて聞ざりし
 が再三詔てやまざれば遂に免して對面し是にも祐成の如白
 綾の小袖を與へけるにぞ時致も又己が衣と着かへ脱たる衣



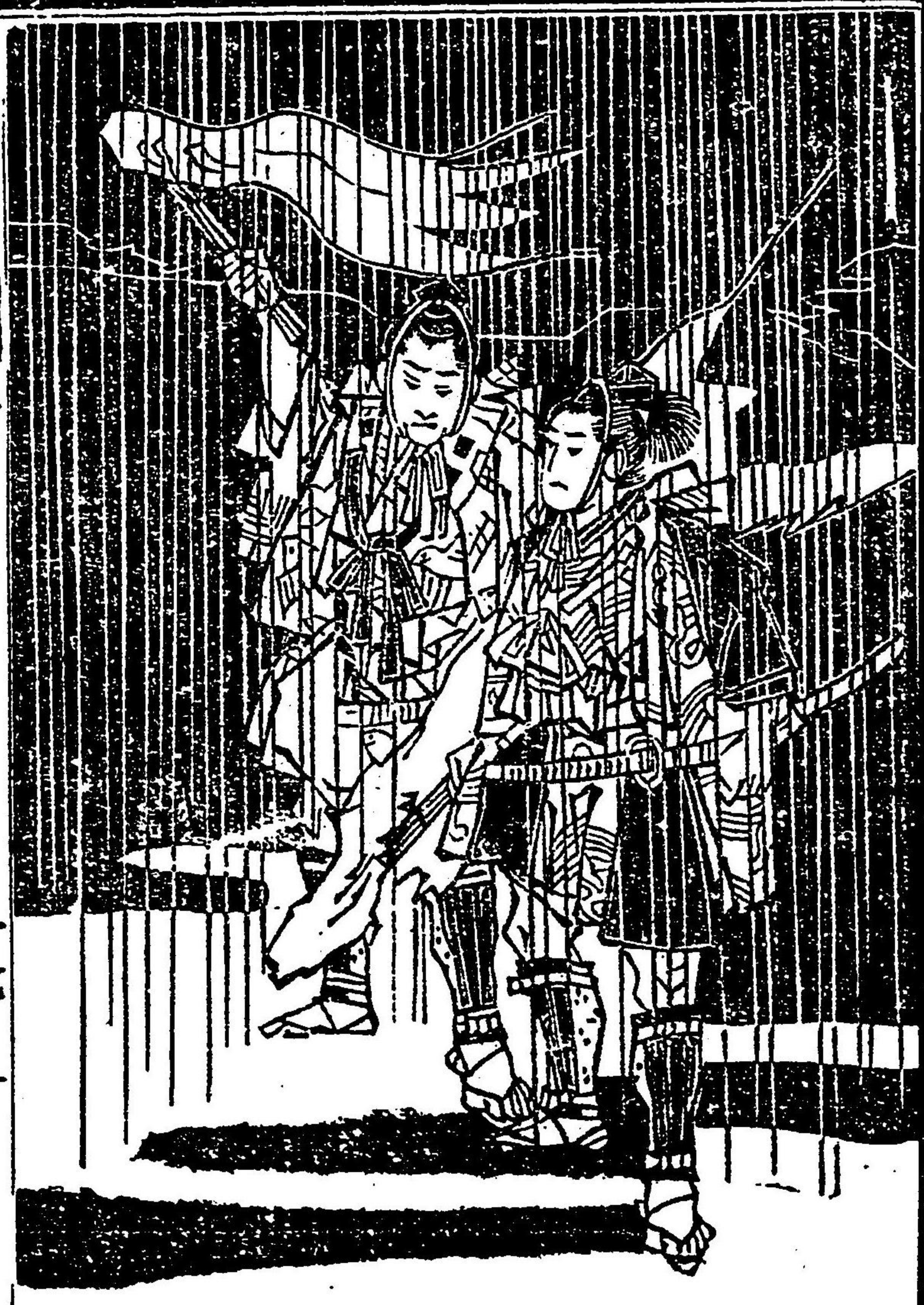
ハ其儘れさぬ斯て兄弟言葉を揃て再び狩場に赴かん事を乞けるに母然程までに思込しなれば如何なりとも心任せにせよと兄弟送に喜び勇みて狩装束を調へ母に暇乞しつ團三郎鬼王を始め五六人の従者を將て立出しが是今生の名残ぞと思へば胸の張裂ばかりに落る涙の偃あへぬを人々に悟れど袖に包て馬に跨り富士野をさして急しが途中にて祐成時致に向ひ僥倖途次なれば箱根山に登り神に祈誓をかけもし又別當にも逢べ別を告んと思ひいかにと云へば時致いしくも心附れたりいざ行逢んと是より愈道を急ぎ箱根山

に到りけるにぞ兄弟馬より下り暫し祠前に拜伏して本望を達せしめ給へと祈り畢り頓て別當の房に赴きしに行實のよく兄弟の心根を知る者ゆる時致が無断に出奔せしをあへて咎めず却て門出の引出物ありとて祐成への木曾義仲の子清水義高より當山へ納めし微塵とあん云へる太刀を送り又時致への源家の重寶たりし友切といふ太刀を送りにければ兄弟深く其恩義を謝して立出たり

○ 第五回

斯て兄弟富士野に至り狩場に立入りて折を得ば祐經を討た

んど日夜心を碎いて其隙を窺へども工藤も用心おさく厳
 重にして更に其機を得ず一日くを送るうちにはや頼朝版
 府の日近づきければ何日まで斯て躊躇べきにあきら若し此
 時を過ぎば何れの日にか本懐を得遂べき咄々曾急に工藤が
 狩屋へ切入て日頃の鬱憤を晴さべしと兄弟談合して共に其
 支度をとゝのへ將て來つる鬼王團三郎をはじめ五六人の從
 者を招き母に宛たる一通の書を認め是に借て來たる小袖を
 添え是の母上へまおらせよ又馬と鞍の曾我殿へ奉れ猶弓と
 矢の汝等へ分ち取とるあり以上の兄弟が心計りの記念の品



に去わればとくく會我へ持返れよと云ふに鬼王等共に討入の供せん事を云へども免されぬバ詮方なくく會我へぞ皈りける斯て兄弟今の思ひ置事もあしうと討入の装せんと雄々しく出立ち夜の更るを待て辛く工藤が狩屋へ忍び入しに祐経はやくも察しけん此程より見とめ置たる所には臥て在ぬバ兩人は是はく如何にと驚きて彼首此首と索れども在處更に知れざるにぞ無念くと拳を握り天を仰ぎて嘆き居たり爰に工藤の狩屋の隣の畠山重忠の狩屋なりしが折ふし其郎黨本出次郎親經夜廻に出來り此様を見やりて哀に思

ひ祐経が臥たる館の襖戸を密と押開き扇をもてさし招きつ「波にゆらる、沖つ所なるべの山は此方ぞと言捨てこそ立去けれ兄弟教に従ひて夫が館へ忍入り松明振揚て見れば果して祐経の此處に遊女手越の少將と共に臥て居り後方に吉備津の神職王藤内も遊女龜鶴と枕を並べて臥居たり兄弟二人の遊女を着物に巻て疊より押れろし聲を立なと言あがら祐経の枕邊近く進み寄て名乗かけ起んとするを起しも立必難なく斬殺して兩人共留めをさし年來の積恨をぞ晴しける王藤内此物音に目を覺し是を見て驚き逃とするを十郎

追かけたゞ一刀に討仆せり斯る處へ他の狩屋の士卒の面々
 彼遊女が斯と告を聞て頃哉狼籍者打取つて功名せんと各柄
 物を引提て打てかゝるゝ兄弟共に力を合せ勇を振て戦ふ程
 にまた、く間ゝ五十餘人に傷を負せぬ人々此手並に恐て暫
 し近寄者もなかりしが良ありて仁出四郎忠經馳來り祐成
 に討てかゝる時に雑兵原忠經を助んと多勢走り出を時致妨
 げすると言ながら彼の友切丸を晃しつゝ、追返す此方の祐成
 望む處の敵いざ御坐ンありと呼りつ迎に戦ひ暫く勝負も分
 ざりしが如何あしけん祐成が太刀鏑元より折ければ忠經得



ふりと跳り込んに首を掻にける時に祐成二十三才ありし
 とぞ時致此處へ立歸り來て是を見るより且怒り且嘆き流石
 に猛心も挫けて暫く涙もみせびて居たりけり斯る折から
 堀藤次と名乗て一人の士出來り切てかゝる時致推參なり
 と言乍ら刀どり直し切結ぶ藤次叶はずして逃往を時致にが
 さじと追來るゝ藤次外へ逃なハ助らじとや思ひけん頼朝の
 館へ逃入けるにぞ時致も續て追入らんとす爰も五郎丸とい
 へる小舎人あり強力の者なれば今時致が舉動を見て是を手
 捕ふせんと薄衣かつぎ五郎丸と行違ひさま其隙をうかゞひ後

より矢庭に確乎と抱とむる時致大力に抱かれながら事とも
 せず宙に引提て猶も入らんと是を見て禪司太郎丸はじめ
 多くの人々走り寄り五郎丸に力を合せ重ねかゝつて抱きと
 めるにぞ時致愈々怒り三四人取て投げ庭へ出んと働さけ
 るが余りに足に力をとめし故板敷ふみ折り足を落しよけれ
 ば人々得たりと前後左右より取付にき時致心ハ彌勇に速れ
 ども多勢も防ぎ難く終に搦め捕られたり

録實
 會我語物

明治十七年十月四日御届
同 年十月廿五日出版

定價十五錢

編輯人 東京府士族
町田 瀧 司
本所區表町三十一番地

出版人 金 幸 堂
稻 垣 良 助
日本橋區米澤町三丁目
十三番地

出版人 金 榮 堂
牧野 惣次郎
日本橋區橋町三丁目
十番地

出版書目

- 録實 曾我物語 ○ 録實 天一坊一代記
- 録實 甲越軍記 ○ 録實 天草軍記
- 録實 四ッ谷怪談 ○ 録實 小栗判官一代記
- 録實 鬼神於松物語 ○ 録實 國定忠次物語
- 録實 小紫權八物語 ○ 録實 鈴木主水一代記

